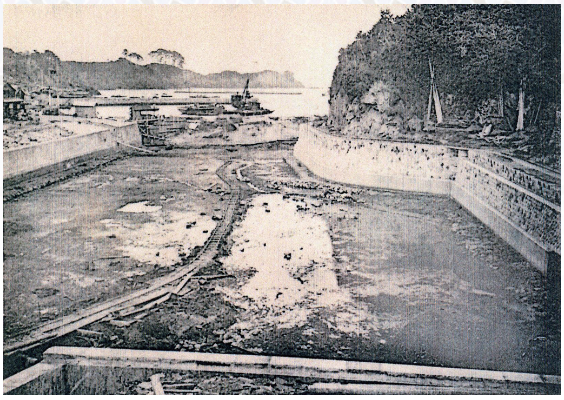
未来に残したい
漁業漁村の
歴史文化財産百選

史実・伝承編

# 「志摩漁業の土木遺産」~波切漁港石積み護岸~　三重県志摩市



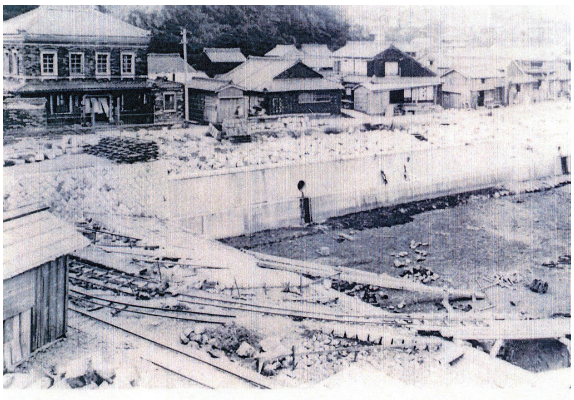
工事中の波切漁港

大王崎沿岸は、古くから漁業が盛んであり、遠くは四国・九州方面からも出漁する、カツオ、マグロ等回遊魚の好漁場を形成していた。しかし、沿岸部の地形は複雑で、明治末期から大正期にかけて海難事故が相次いだと言われる。

明治中期には、漁船が急増し、明治 34 年の漁業法公布により、同 36 年に波切漁業組合が設立、同 38 年には東洋水産株式会社波切工場が設置された。このような活況の中、明治 45 年頃から漁船動力化と大型化傾向が見られ、明治末期から大正初期にかけて波切漁港は、漁業生産拠点としての役割が拡大すると共に、益々その利用が輻輳してきたのである。

一方、明治 43 年に、当時の農商務省が漁業奨励に影響の大きい漁港について、国庫補助による漁港修築をめざした調査を実施し、波切漁港修築事業もその他 4 漁港(福島県小名浜港、千葉県白浜港、新潟県能生港、宮崎県油津港)と合わせて、大正 7 年に農商務省・内務両大臣の認可を受けることとなった。同年、国では 27 万円の補助金が予算計上され、工事費の 1 ／ 2 を補助することになった。

波切漁港修築工事は、大正 7 年の用地買収と家屋移転を経て、同 8 年 12 月に工事に着手し、その後、総工費 92 万円、延べ 22 万人の労働力を投入して、昭和 3 年に完成している。工事には、多くの地元民が関わったと言われているが、なかでも波切の石工は、温存されていた技術を十分発揮すると共に、多くの弟子を養成、「波切の石工」の名をなさしめる原動力となった。当時の工事誌によると、波切漁港修築工事に使用した石材は、当初港内で調達する予定であったが、あまりの量の多さに全てを補うことはできず、和歌山方面から調達したと記されている。



工事中の波切漁港

## みどころ

- **大王埼灯台：志摩半島の先端で遠州灘と熊野灘を分け、かつて海の難所と恐れられた大王崎に、昭和 2 年(1927)に建てられた白亜の灯台。灯台上部からの展望が楽しめる(有料)、平成 10 年(1998)に「日本の灯台 50 選」に選ばれた。**
- **絵かきの町:旧大王町では、灯台や石積みのある風景を活かし、平成 8 年に「絵かきの町・大王」を宣言し、毎年、絵画・写真コンクールの開催、関連モニュメントの設置等の活動を行っている。**